<table>
<tr><td colspan="3">団体名</td><td>浦崎ひまわり会　(広島県尾道市)</td></tr>
<tr><td rowspan="4">団体の概要</td><td colspan="2">活動開始年</td><td>西暦　1990 年　10 月　活動開始</td></tr>
<tr><td rowspan="2">メンバー</td><td>人数</td><td>＜役員数＞　24 名　　＜事務局スタッフ数＞　5 名
＜ボランティア数＞　102 名　＜賛助会員数＞　　50 名</td></tr>
<tr><td>構成</td><td>主婦、女性民生委員、女性会役員、保健推進委員、母子会会員、老人会会員等より入会を希望する者</td></tr>
<tr><td colspan="2">予算規模</td><td>平成１３年度概算
･収入　\490,000　　･支出　\400,000</td></tr>
<tr><td colspan="3">団体の目的</td><td>家に閉じこもりがちな高齢者や介護予防的サービスの必要な方及び子育て中で交流を求めている方などを対象に、ふれあいの場を設け、健康の維持を図り、生きがいを見出す場づくりを提供する。</td></tr>
</table>

①ボランティア活動の概要

浦崎ふれあいの里を拠点に、次のことを中心にした活動をする。

■　「託老」およびお年寄りの会：週１回木曜日（10～15 時）
　リハビリの先生にきてもらい指導を受けたり、食事をしながらおしゃべりを楽しむ

■　生涯学習の場づくり（手作りの会）：月２～３回
　老人仲間で編み物、書道、アートフラワーの会をもつ。

■　子育ての会の交流会：月１回
　子育て中の親子が集い、親子遊びや子育ての知恵の情報交換、おしゃべりを楽しむ

■　手話の会、難聴者との交流会：月１回

■　学習会及び研修会:年４～５回

②ボランティア活動を立ち上げた経緯

会の代表者を含む２～３人が 1985 年頃から介護問題に関心を持ち始め、近隣の町で開催されていた介護講座を受講したり、尾道市街にある呆け老人を支える家族の会に入会して１日託老、施設見学、勉強会などを重ねてきた。なかでも託老の活動は、介護をしている家族も一緒にきて楽しみストレスを解消して心から安らいで帰っていく様子や、お年寄り自身も笑顔が出て明るくなる様子を間近にみることができ、地元の浦崎でも同じような活動がしたいと思いたった。そこで、地区内で家族に痴呆症状のあるお年寄りがいたり、過去にこうしたお年寄りの世話をした経験のある人が集まって 1990 年に会を発足した。

特別養護老人ホームの職員や、保健所の保健師、民生委員、地区社会福祉協議会などとも相談しながら、手探りで託老をはじめた。活動場所も、浦崎支所の２階や特別養護老人

ホームなど転々としていたが、郵便局舎の新築に伴い、地区のメインストリートにあった旧局舎を「浦崎ふれあいの里」として利用できることになった。こうして、地区社会福祉協議会が旧局舎を借り上げ、浦崎ひまわり会に運営を託す地域ぐるみの取り組みとなった。旧局舎の改造は、建築労働組合がボランティアで労力提供をしてもらった。

その後、1996 年に地域にあるクリニックでデイケアが開設されたため、痴呆のお年寄りや重度の要介護の人は、そちらに通所をするようになった。そこで浦崎ひまわり会では、元気な高齢者を対象に、その元気を維持するための見守り活動をすることになった。さらに、浦崎ひまわり会の活動のなかで、手話を学びたいという声があがり「浦崎手話の会」が発足したり、多世代が交流し地域で子育てを考えてみようと「浦崎子育ての会ほっとサークル」が結成されるなど、現在は高齢者だけでなく地域の人に広く開いている多目的サロン活動へと展開している。

③元気に活動している要因

＜要因１：学びあいと知恵の出し合い＞

託老とは、高齢者の命を預かる活動でもあり、痴呆の症状に対する対応やケアの仕方など、ボランティアといえども専門的な知識を要求される場面もある。浦崎ひまわり会では、行政や社会福祉協議会が主催する勉強会に出席したり、先進的な活動を行っている団体で実際に活動を体験しながら学んだりという段階を経て発足している。さらに、活動を継続するなかにおいても、研修会や学習会を定期的に開催し、会員相互の理解と交流を深めるように努めている。

＜要因２：地域の状況やニーズに応じた活動に取り組む＞

要介護者の託老活動が発端であったが、近隣にクリニックができデイケアをはじめたため、元気高齢者を対象にしたサロン活動へ転換するなど、地域の状況に応じて柔軟に活動内容が変化している。自分たちですべて何でもやるというのではなく、任せられるものは任せよう、他に受け皿がないものをやろうという姿勢で、できる人ができることを担いながら取り組んでいることが、活動を無理なく元気に続けていける秘訣といえる。

＜要因３：拠点を得て活動が飛躍＞

開始当初は安定的な場所がなく、いろいろな機関の好意を受けながらも転々としておりボランティアにとっても利用者にとっても、どこか落ち着かない部分があった。それが、旧郵便局舎を改造した「浦崎ふれあいの里」の利用が可能になり、活動の拠点ができたことで定着した活動になるとともに、さまざまなアイディアを取り入れて新たな活動へと展開することもできるようになった。現在では浦崎公民館が新築されてより広い活動場所の利用が可能となったが、「浦崎ふれあいの里」はアットホームなこじんまりとした場所として、地域の住民に親しみをもってもらっているため、交流の場または研修の場として活用

している。

④今後の課題・展望

浦崎町は、三面を海に囲まれた温暖な土地で、医療機関は整っており、更に特別養護老人ホームの介護サービスも受けやすい恵まれた場所ではあるが、尾道市の中心部から遠く（30ｋｍ）離れていて、市内への交通が不便であることに合わせて、会員のほとんどが高齢者であるため、研修会、学習会に参加しづらい側面がある。そこで地域でできる「手作りの会」を発展させていきたいと考えている。

（団体代表者によるレポート、団体資料より作成）

＜子育ての会の交流会の様子の写真＞

＜おとしよりの日の写真＞

＜この事例のポイント＞

浦崎ひまわりの会では、特にボランティアのメンバーの募集はしていないが、学習会や手作りの会の活動を通じて、仲間とともに活動することを希望して、自ら進んで入会してくる場合が多いという。グループの立ち上げ当初は、介護中の人、介護経験者といった同じ課題を持つ人達の集まりであったが、浦崎ひまわり会の活動を身近でみていた地域の人を幅広く巻き込むことに成功し、徐々に助け合いの輪が広がっている。たとえば、お年寄りの日の昼食に、畑でとれた野菜や漬物、煮物を差し入れてくれる人がいたり、編み物や貼り絵の得意な人が講師になって教室を開いたりと、地域の人たちが気軽に立ち寄って浦崎ひまわり会の活動を支えているという。

地域の人々から見えやすい活動になっていることから、互いに声をかけあって相手を気遣い労わるこころが根付くという効果が生まれているものと考えられる。その意味で、地域の住民がよく知っているような利便性の高い立地に拠点を構えることができたことは、大きな意義がある。活動場所の確保は、安定した活動の継続には欠かせないものと考えられ、ボランティア団体が支援を求めているケースも多い。